

## 伊達政宗公の法要と

## 仙台藩茶道石州流清水派による献茶式

仙台藩茶道石州流清水派（当流）による献茶が行われるが、筆者はこれを最も重要な当流の行事として取り組んできた。そこで、最初に政宗の茶道との関わりと瑞鳳殿について簡潔に紹介し、次にその法要と献茶について述べたい。



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世

### 大 泉 道 鑑



写真1. 仙台城の伊達政宗  
騎馬像と筆者

仙台藩祖伊達政宗公（永禄一〇年～寛永一三年一一五六七～一六三六）の遠忌法要が命日（五月二十四日）に、政宗の靈廟瑞鳳殿（写真2）で毎年執り行われる。読経に先立つて、

誕生した。幼

少の頃から、

資福寺の住職で名僧の誉れ

の高い虎哉宗

乙（享禄三年

～慶長二年一

一五三〇～一

六一一）から

学芸の指南を

受け、高い教

養を身に付け  
ることが出来



写真2. 法要式典場 瑞鳳殿（本殿）

たと言われている。ところで茶道について、政宗が文献に最初に登場したのは、「伊達治家記録」(「貞山公治家記録」)の天正一五年(一五八七)正月九日条に記述された茶会のことである。同記録にはそれ以降にも、政宗が茶会を催してたり招かれたりした記事がしばしば見られる。

一方、天下統一を目指していた豊臣秀吉(天文五年～慶長三年一一五三六年一五九八)が小田原北条氏政(天文七年～天正一八年一一五三八年一五九〇)を征伐するためには、政宗にしばしば上洛を命じたが、なかなか応じずかなり遅れて参陣したため、秀吉の怒りを買ったと言われている。その際に、政宗が「この度の出陣には千利休(大永二年～天正一九年一一五三六年一五九一)が御供したと聞くが、茶湯の話を伺いたいので、参会出来るように取り計らつていただきたい。」と要望したところ、秀吉は「命も危ういという時に、このようなことを申し出るとは奇麗なことだ。」と言って、やっと秀吉に拝謁することを許したという逸話がある。

桃山時代になると、政宗は茶道を政治・外交を行う上におおいに活用しており、秀吉は勿論のこと、徳川家康(天文一一年～元和二年一一五四二六年一六一六)、二代将軍徳

川秀忠(天正七年～寛永九年一一五七九年一六三三)などの將軍を始め諸大名を茶会に頻繁に招いている。また、秀吉に仕えた利休、家康の茶頭 今井宗薰(天文二一年～寛永四年一一五五二六年一六二七年)、秀忠の茶道指南役を務めた古田織部(織部流の流祖、天文一三年～元和元年一一五四四年一六一五年)、四代將軍徳川家綱(寛永一八年～延宝八年一一六四一年一六八〇)の茶道師範に任せられた片桐石見の守貞昌(石州)(石州流の流祖、慶長一〇年～延宝元年一一六〇五年一六七三年)の茶道師範である桑山左近(宗仙)(永禄三年～寛永九年一一五六〇年一六三二)、さらには三代將軍徳川家光(慶長九年～慶安四年一一六〇四年一六五年)の茶道師範を務めた小堀遠州(遠州流の流祖、天正七年～正保四年一一五七九年一六四七年)などの当時一流の茶人とも積極的に交流していくことからも、茶道への並々ならぬ傾倒ぶりを窺い知ることが出来る。以上述べたように、茶道にかなり造詣が深かった政宗の法要で、心のこもったお茶を点て献上することは、仙台藩縁の石州流清水派宗家にとって、仙台伊達家との絆をさらに強めていく良い機会として、極めて意義深いことと考えている。

ところで、政宗は、七〇歳で寛永一三年(一六三六年)五

月一四日江戸桜田の藩邸にて波乱に満ちた生涯を閉じた。

遺言により、仙台市都心部の南西、広瀬川のほとりの経ヶ

峰（経ヶ峰歴史公園 仙台市青葉区靈屋下二三一）に埋

葬され、その翌年一〇月に二代藩主伊達忠宗（慶長四年）

万治元年一一五九九（一六五八）が、そこに政宗を祀る瑞

鳳殿を建立した。瑞鳳殿は、本殿（写真2）、唐門・回廊、

拝殿、御供所（現在、資料館）、涅槃門から構成され、そ

の正面が仙台城本丸を向くように建てられていた。この建

造物は、絢爛豪華な桃山様式廟建築として極めて貴重な文

化財であったため、昭和六年（一九三二）国宝に指定され

た。しかしながら、第二次世界大戦の終戦直前の昭和二〇

年（一九四五）七月一〇日のアメリカ軍による空襲により、

全て灰燼に帰してしまったのは、郷土の人間として誠に残

念である。

その後、瑞鳳殿を再建しようという機運が次第に高まつたが、その再建工事に先立つて昭和四九年（一九七四）に、その墓室の発掘調査が行われた。政宗の完全な遺骨と共に、鉄黒漆五枚胴具足、金梨子地桐葵紋蒔絵糸巻太刀などの武具類、また黒漆地葛蒔絵文箱などの文具類、さらに金製ブローチ（ヨーロッパ伝来品）や煙管（キセル）など学術的

に貴重な三〇点以上の副葬品が出土したとの当時のニュー

スの強烈な印象は、今でも私の脳裏に鮮明に焼き付いてい

る。昭和五四年（一九七九）についに瑞鳳殿が再建され、

その後昭和五九年（一九八四）には仙台市指定文化財に指

定された。なお、その本殿の両側には二十基の石塔が並んで

いるが、これらは政宗が亡くなつた後、殉死した二十名

の家臣達の供養塔である。

さて、政宗

の法要は、昨

年で第三七七

回目を迎えた。

仙台伊達家に

縁の深い瑞鳳

寺、瑞巖寺

（国宝）、覚範

寺、資福寺、

保春院、東昌

寺、光明寺、

満勝寺及び善



写真3. 瑞鳳殿（本殿）に向かう仙台伊達家  
十八代当主伊達泰宗氏

寺の住職が仙台伊達家十八代当主伊達泰宗氏を先導し（写真3）、それに続き参列した殉死者後裔会、仙台藩志会、大年寺会、（財）瑞鳳殿、再建事業建設会社、靈屋下町内会及び向山経ヶ峯親交会の団体の会員が行列を作り、当日の午前九時に瑞鳳寺山門を出発して瑞鳳殿へ向かった。午前九時四五分に法要が開始されたが、読経に先立ち、奉獻の儀が厳かに執り行われた。本原遠州流華道八世家元朴澤一草氏による献花、仙台藩作法宗家伊達泰宗氏による献香、筆者による献茶及び仙台藩虚空山尺八寺布袋軒玉堂氏による献笛が順次行われた。



写真4. 献茶式の茶道具

大泉道紀による献茶のお手前は、瑞鳳殿の本殿と拝殿の間の正面左手の所に設けられた白木の台子の前で行われた（写

政宗は、戦国時代を知略を尽くして生き抜き、戦国武将として全

国に名を轟かせた。歳月が流れ、時が戦国から安土・桃山時代を経て太平の世江戸時代に移る（写真4及び5）。法要開式の十分前頃から献茶のお手前を始め、その点てたお茶は畠谷道恵（教授）から私に手渡され、それを瑞鳳殿本殿に運び、伊達文化の礎を築いた政宗に感謝の意を込めて献上した（写真6及び7）。引き続き読経が開始され、先に述べた団体の代表者による焼香が行われ、最後に伊達泰宗氏と仙台藩志会副会長伊達宗行氏が挨拶をして、無事法要が終了した。



写真5. 伊達政宗公への献茶のお手前を行う大泉道紀

仙台藩の政治・経済の基盤を築くことに心血を注ぐ一方、藩内に桃山文化を見事に開花させようと心を碎き、「伊達文化」の礎を確固たるものにした。このことが、文武両道



写真6. お茶を受け取る畠谷道恵  
(教授)と筆者



写真7. お茶を献上して  
席へ戻る筆者

に傑出した日本屈指の大名との評価を政宗が勝ち取ることが出来た所以である。だからこそ、政宗はまさに英雄として私共郷土の人々の尊敬の念を一心に集めている。仙台藩の正式な流儀である当流は、茶道にもひたむきに情熱を注いだ政宗の法要に於いて、献茶の重責を担ってきた。献茶を終えると、この大役を果したことに安堵して、微力ながら郷土の英雄に恩返しが出来たのではないかと思いつつ、来年の献茶式でも全身全霊で茶を点てて献上することを新たに心に誓いながら、我が道門会の皆様(写真8及び9)と共に瑞鳳殿を後にした次第である。

### 参考文献（五十音順）

- 『原色茶道大辞典』 井口海仙、末宗広、永島福太郎監修  
淡交社 昭和五〇年
- 『講談社 日本人名大辞典』 上田正昭、西澤潤一、平山 郁夫、三浦朱門監修 講談社 平成二一年
- 『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』 十世大泉 道鑑 丸善出版サービスセンター 昭和五五年
- 『仙台藩ものがたり』 河北新報社編集局 河北新報出版社 センター 平成二二年
- 『伊達家治家記録』 仙台市博物館蔵
- 『伊達家の秘話 独眼竜一族の知られざる素顔』  
伊達泰宗、白石宗靖 (株) PHP研究所 平成二三年



写真8 献茶式を終えて(1)  
仙台藩茶道石州流清水派道門会の皆様



写真9 献茶式を終えて(2)  
仙台藩茶道石州流清水派道門会の皆様